

Ruth Boyask, 2012, "Sociology of education: advancing relations between qualitative methodology and social theory" In Sara Delamont(eds), *Handbook of Qualitative Research in Education*, Edward Elgar Publishing Limited, pp.21-32.

(ボヤスク・R、第2章「教育社会学：質的方法論と社会理論の関係の前進」デラモン  
ト・S、『教育の質的研究ハンドブック』.)

### はじめに<sup>1</sup> (pp.21-22)

- ・ ライト・ミルズはかつて「社会学的想像力」という言葉によって、「個人的な問題」と「社会構造の公共的な問題」の関係に目を向けることの重要性を提起した。このミルズという言葉借りれば、社会学的想像力をもって教育を見ることは、個人と公共的な問題との関係に焦点を当てることを意味する。
- ・ 社会学において、経験的方法論の議論が蓄積されている。多様な方法論は主に質的、量的、その混合法の3つのアプローチのいずれかに位置づけられる。これら3つの方法論はすべて教育社会学で用いられているが、方法論の選択は社会学的思考の立場の選択と親和的である。
- ・ 本章では、質的研究の方法と教育社会学との関係について議論するが、この関係は教育についての知識をめぐる広範な論争に影響を受けている。現在、研究者・政策立案者・実務家などが、経験的なアプローチによって教育に関する問題の解決策を模索しているふりをしてしている。それは教育研究では経験的研究が増加しているのに対して、社会学的ディシプリンは衰退傾向にあることを意味している。この状況を理解する際には、教育社会学と質的研究の関係における理論と方法論の重要性が、知識の政治的な性質によって変化することを考慮に入れる必要がある。経験的研究は、教育の開発と評価において重要な役割を果たしているが、質的方法は量的方法に比べて、強固なエビデンスを生み出す上では二の次であると考えられているのである。
- ・ 本章の目的は、この状況を受けて、質的方法論、社会理論、そして教育社会学の将来の方向性との関係について議論を整理することである。

### ミクロとマクロの二分法 (pp.23-25)

- ・ 20世紀を通して、義務教育の世界的な発展は公共の問題として教育を位置づけた。そのため、教育社会学への関心も20世紀初頭から中期にかけて高まった。現在も義務教育の発展は続いており、教育研究は現在、生産的な調査 (investment) 領域となっている。
- ・ 他方で、研究 (study) 分野としての教育社会学は衰退しているように思える。例えば、イギリスでは学術誌への寄稿が減少し、大学のプログラムが減少している。この変化について Shain と Ozga<sup>2</sup>は、教育社会学が、イギリスにおいて優勢であったマルクス主義社

<sup>1</sup> 本文では節の区切りがないが議論の展開を便宜的にレジュメ作成者が設けた。

<sup>2</sup>Shain, Farzana, and Jenny Ozga. 2001. "Identity Crisis? Problems and Issues in the Sociology of

会学の影響のもとで、社会的不平等の維持するための手段として教育を位置づけたことと、それによる政策立案者による教育社会学の排斥があると指摘している。

- そのような状況の中で、教育社会学の研究がマクロ社会学とミクロ社会学の 2 つの陣営に分かれているという問題がある(表 1)。このマクロ/ミクロの区別は、教育研究の中でも継続的に浸透している。しかし、この二分法の議論に参加するのは実りのないものになってしまう。

表 1 教育社会学におけるミクロ/マクロ社会学の立場

マクロ社会学		ミクロ社会学
・マルクス主義社会学	社会学的立場	・相互作用論
・一般化や比較できることが重要 ・社会構造が教育機会に与える影響など	関心	・個人とミクロなコンテキストの関係
・統計的手法を重視	方法論との結びつき	・質的方法を重視

- ・ 現在進行中の議論の整理
  - Boocock(1980)<sup>3</sup> : 教育社会学はマクロ/ミクロ社会学の双方からその都度適切な方法を引き出し、質の高いエビデンスをまとめることで、教育学者は個々の研究や方法論の限界を克服することができる。
  - Clegg(2005)<sup>4</sup> : 社会学の重要な問題に取り組むために定量的データの使用を排除するものは何もないが、定性的研究方法は、特定の社会学的問題に答えるための避けられない方法である。個人の生きた現実、およびその現実の中で行動する方法を研究することが必要であると主張する。そしてそれが社会構造の一般的な理解に貢献することができるかと主張する。
  - Edwards(2002)<sup>5</sup>、Morais(2002)<sup>6</sup> : イギリスの教育社会学者バジル・バーンステインの議論を理論と方法の間の弁証的關係を結ぶものとして位置づける。そこでは、経験的なものを理論化した形での分析と、定型化された形での理論を実践に当てはめて使用することの双方が否定される。

## 二分法の現代的展開 (pp. 25-28)

- ・ 理論と方法の弁証法的アプローチへの傾向は、21 世紀の社会の複雑さや個人と社会の間の複雑な關係を記述しようとする理論の増加と類似している。その一方で、現在の教育

Education.” *British Journal of Sociology of Education* 22(1):109-20. doi: [10.1080/01425690020030819](https://doi.org/10.1080/01425690020030819).

<sup>3</sup> Boocock, Sarane Spence. 1980. *Sociology of Education: An Introduction*. Revised 版. Boston: Houghton Mifflin.

<sup>4</sup> Clegg, Sue. 2005. “Theorising the Mundane: The Significance of Agency.” *International Studies in Sociology of Education* 15(2):149-64. doi: [10.1080/09620210500200137](https://doi.org/10.1080/09620210500200137).

<sup>5</sup> Edwards, Tony. 2002. “A Remarkable Sociological Imagination.” *British Journal of Sociology of Education* 23(4):527-35. doi: [10.1080/0142569022000038387](https://doi.org/10.1080/0142569022000038387).

<sup>6</sup> Morais, Ana M. 2002. “Basil Bernstein at the Micro Level of the Classroom.” *British Journal of Sociology of Education* 23(4):559-69. doi: [10.1080/0142569022000038413](https://doi.org/10.1080/0142569022000038413).

研究では、理論的基盤の不在が指摘されている。

- ・ その背景にあるもっとも重要なものの一つは、教育に対する国からの出資が増加したことである。政府は義務教育後の教育セクターに多額の投資を行うようになった。それは、一方では、グローバル化した経済システムの中での競争力の獲得を、他方では社会参加と公平性の向上という矛盾した2つの性質を持っている。
- ・ このことは、教育社会学において、特定の介入がもたらす因果モデルを提供するための道具として研究が行われるようになることへとつながる。そこでは、経済学の論理との結合から、経済的に有用であると期待されるものに限定して教育研究が行われ、特定の介入の効果を実証的に明らかにする統計的研究が重視されるようになる。これは同時に、教育社会学が元来の文脈とは異なり、社会学理論との関係が後景化したかたちで行われることへとつながっている。
- ・ これに対して質的方法論の擁護者は、直接的な因果関係を重視する教育研究は、教育という課題が複雑であるために、応用に限りがあると認識している。

### 教育社会学の伝統的な質的方法論 (pp. 28-29)

- ・ Metz(2000)<sup>7</sup>によれば、伝統的な教育社会学の質的研究の方法論はシカゴスクールの社会学との結びつきがあり、それは次の4つの要素が含まれている。
  - ① 集団の立場や世界観から (≡インサイダーとして) 集団を理解しようとする
  - ② インサイダーの視点は、集団の生活への参与によって培われる
  - ③ 社会学者の主観と社会学の理解の仕方が分析に影響を与える
  - ④ 複数ある・重複する集団で構成された複雑な設定の中で集団を研究する
- ・ 相互作用に着目するエスノグラフィーは教育においては 1960 年代後半から 1970 年代にかけて現れた。そして、それは 1970 年代のネオ・マルクス主義や批判的フェミニズムを理論的基盤とする批判的な教育社会学<sup>8</sup>の理論へとつながっていった。
- ・ しかし、エスノグラフィーにおいてもその方法論が社会理論から切り離される時、先に挙げた経済的な論理と結びつく危険性を持っている。

### 教育研究の役割 (pp. 29-30)

- ・ 確かに、方法論の議論の精緻化や教育の効果への貢献をすることは重要であるが、それは冒頭に示したミルズの社会学的想像力の基準をどの程度満たしているのだろうか。例えば、現在の教育社会学研究が、公共の問題を明らかにすることから遠ざかるようになっていることが指摘されている (Riehl 2001<sup>9</sup>)。この点はイギリスの研究者グループにお

<sup>7</sup> Metz, M. H. 2000. "Sociology and Qualitative Methodologies in Educational Research." 70:60-74.

<sup>8</sup> これは、日本では主に「新しい教育社会学」と呼ばれるイギリスの教育社会学の一系譜である。著者はここではウィリス (1997) 「ハマータウンの野郎ども」を取り上げている。

<sup>9</sup> Riehl, Carolyn. 2001. "Bridges to the Future: The Contributions of Qualitative Research to the Sociology of Education." *Sociology of Education* 74:115. doi: [10.2307/2673257](https://doi.org/10.2307/2673257).

いても問題視されており、最近では **British Educational Research Association** と **Teaching and Learning Research Programme** が共同で「教育研究における理論の役割」をテーマとしたワークショップを開催している。

- 教育社会学者にとっての現在の課題は、教育研究へのアプローチの強化および社会理論と方法論の再接続の方法の検討である。つまり、教師や学習者やその他の人びとが身近な環境で直面する問題（＝個人的な問題）と、「社会構造の公共的な問題」との関係を明らかにすることが必要である<sup>10</sup>。

---

<sup>10</sup> その一つとして、著者は詳細に検討をしているわけではないが、Burawoy (1998) の拡張ケース法が挙げている。